

中学校での「生徒とつくる 家庭科の授業」実践

笹森 史子

SASAMORI Fumiko
公立中学校家庭科教員

なぜ「家族」を学ぶことが大切なのか、 教科書にはどう書かれているか

(1) 家庭科で「家族」を学ぶということ

教員生活が長くなるほど、生徒の行動の背景にある「家族」の姿が見えるようになってきた。生活指導の場面では、「これ以上は家庭の問題だから」と線引きをすることがあるが、「家庭科の授業」ではそうはいかない。学習内容の全てが、自分の家庭生活を見直すものになっているからだ。理想の家庭像を表面的に伝えるだけでは、生きた学習にならない。多様な家族、多様な暮らし方に向き合い、生徒と共に授業をつくっていくことが大切な教科なのである。従って、家庭科教員は、教材研究でも、個々の生徒の現実から目をそらさない覚悟が必要になる。

「家庭科の授業」を通じて、自分の家族に感謝の気持ちを抱いたり、将来の自分の生き方に夢を思い描ける生徒は多い。しかし逆に、自分の家庭の課題に気づき、子どもの力ではどうすることもできない現実を受け止めなければならない生徒もいる。前者の生徒の些細な言動が、悪気は無くとも、そうした友だちを

傷つけることもある。

自分の家庭を肯定的に捉えられる生徒には、「家族に頼ること」を当たり前せず、「自立」に向けて自分の出来ることは何か、を考えさせる。厳しい環境の中にいる生徒には、「家族に頼れぬ現実」を生きる力を磨くチャンスと考え、たくましく「自立」する力をつけるにはどうしたらよいか、社会の中でどんな支えを利用できるか、を学ばせる。それらを同じ教室の中で行うことが、本当の意味で「多様な家族」を学ぶことにも繋がると私は考えている。

(2) 筆者の「家族観」の変化

中学時代の私は、両親と妹の4人家族。典型的な核家族の中で暮らしていた。仕事人間の父と専業主婦の母…当時は恐らく多かったフツーの家庭環境の中にいながら、私自身はずっと違和感を抱えていた。「長女だから」、「女だから」、と両親や周囲から押しつけられるジェンダーバイアスが苦しくて仕方なかった。多様な家族や考え方について学ぶチャンスもなく、悶々と過ごしていた時期だ。

全く違う考え方や生き方があることを知ったのは、大学で「家族関係学」を学んでから。「当たり前」と思い込んでいた自分の家庭環境が、多様な家族の一つの形であると気づいた時の開放感といったら…。自分が誕生する家族の場所や形は選べないけれど、自立後の生き方はまだわからないのだという希望でいっぱいになったのを覚えている（もちろんそれも思い通りにならぬ事は後に分かるのだが…）。平凡に見える家族の中にいる生徒でも、色々な思いがあると思う。

(3) 家庭科教員の強み

中学校に家庭科教員はたいてい一人で、全学年全クラスの授業を担当することになる。数年間勤めると、地域の特徴やきょうだい関係もわかってくる。これは、生徒を知る上で大きな強みになる。日頃からできる限り生徒の様子を観察し、会話し、提出された課題を点検していると、その生徒が家族とどう関わっているのかも見えてくる。いつも家族分の食事を作っているという生徒とは、「今日何のおかずにする〜?」。ニュースをよく見ている生徒とは「同性婚は日本で

も認められるようになると思う〜?」。…といった具合に、皆の前で意識して話しかける。自分の知らない話に詳しくたり、出来ないことをしている同級生の存在は、他者を意識する中学生たちを刺激し合う。

(4) どの教科書も「利用」する

教科書によって「家族」の取り上げ方はかなり違っており、多様性を意識した記述が多くあるものから、ほとんど触れられていないものもある。教科書は選べないので、要は「教科書を」教えるのではなく、「教科書を利用して」教えればよいのだと思う。どの領域にも「切り口」が沢山ある。カラフルに彩られ、色々な家族を描いたイラストや写真も、突っ込みどころ満載だ。だから何も『家族の領域』だけで学ばせようとしなくてよいのだ。何せ家庭科は、全編が家族関係に関わる内容になっているのだから。

因みに、現任校で使用している教科書は、多様性も含めた表記が色々工夫されている。この中に、進路を意識しつつ4月を迎えた3年生の最初の授業で、私が必ず読み合わせをする文章がある。

「家族の変化～わたしたちと家族との関係は、自分の成長ばかりでなく、家族の形態や人数によっても異なってきます。弟や妹が誕生したり、離れて暮らしていた祖父母がいっしょに住んだりすることで、家族の新しい関係が生まれます。また、親の再婚や、親の養子縁組、里親委託により家族になる人やいっしょに住む人との新たな関係が生まれることもあります。きょうだいの独り立ちや、両親の離婚、家族の死によって家族と別れることもあります。親の病気などで家族との生活ができなくなり、家族と別れて親せきと暮らしたり、児童養護施設などで、そこの職員や他の子どもたちと暮らすこともあります。このように、家族の形や生活のしかたは一定ではなく、変化していきます」(開隆堂教科書本文より抜粋)。

これを読みながら、教室の中にいる生徒たちの家族の事情を想像する。そこには家族の「離散」「離婚」「介護」「病気」「死」…などを実際に経験している生徒が必ずいる。一方で、そんな厳しい現実を想像すらできない生徒もいる。私たち

家庭科教師の「家族を学ぶ」教材の投げかけ方によって、生徒たちの学びは大きく変わってくる。その責任の重さを再認識し、3年生の授業をスタートさせている。

授業づくりのために、大切にしていること

(1) 生徒の実態把握

授業を始めるにあたって、絶対に大切にしなければならないと思っていることは、生徒たちの実態を知ることだ。

各家庭から回収する「家庭環境調査書」は、現在は必要最小限のことのみ記載するものとなっているため、それだけでデリケートな事情を知ることはできない。「家庭訪問」もなくなり、生徒の生活の様子は見えにくく、日々の生活の中で徐々にわかってくる複雑な家庭環境もある。私は書類よりも、学級担任や養護教諭、スクールカウンセラーとの会話を大切にしている。そして実は一番頼りになるのが、日々の生徒との会話だ。生徒との関係性をつくり、センサーを働かせる努力をしている。遅刻した生徒に「生活指導」で終わらせず、「何時に寝たの?」「朝食べてきた?」と訊ねると、「親が田舎のおじいちゃんの看病に行って、実はここ数日ひとりで食べてる」「大学生の姉が毎晩バイトで深夜に帰宅して、起こされてしまう」「塾のテスト結果が悪くて、1時過ぎまで父親に説教された」等々、「それぞれの家庭の事情」が、必ずと言っていいほど生徒の行動に繋がっていることに気づかされる。そんな会話をするうちに、生徒の方から寄ってきて、「先生、〇〇ちゃんのお母さん、出ていっちゃったんだって」「お父さんが仕事を辞めてずっと家にいてお母さんとケンカばかりしてるから帰りたいって」など、実に切ない事情を友だちが伝えてくることもある。そんなリアルな生活をしている生徒たちを前に、「家族に感謝する」とか「家族で支え合う」のが大切だという「理想」を語る授業をして、彼らの心に響くわけがない。様々な学びの中で、生徒が自ら考え、その結果として「感謝」や「協力」の大切さを理解するならともかく、授業で「教える」ことではないと思っている。

生徒の現実を知っていると、こちらの話し方をしっかり準備することもできる。例えば、「親を亡くした生徒のいるクラスで、親の死について語るのは避け

る」という人がいるが、私は可能な限りそれにも向き合うようにしている。授業の前に、本人に「こういう話をするつもりなんだけど、あなたにはきつかな？」と相談し、あらかじめ話す内容を確認したこともある。身近な家族の死を経験した同級生が同じ教室にいることを想像できないために、「死」を笑いのネタにする生徒がいる。だから「取り上げない」のではなく、そうした残念な反応も、「多様な家族を学ぶチャンス」として、私は利用すべきだと考える。

(2) 日々のニュースや、アニメ、TVドラマ、映画から「テーマ」を探す

教科書には限界があるし、経験の少ない中学生に「多様な家族」を身近なものとして実感させるのは難しい。そこで私が教材研究で利用するのは「新聞やインターネット、テレビにあるニュース報道」である。昨年は、「夫婦別姓」「パートナーシップ条例」「同性婚」のニュース報道が多くあり、大いに利用することができた。授業で取り上げると、生徒はすぐに関心をもち、次の授業の時に「先生、判決が出たね！ やっぱりダメだったね。日本ってホント遅れているわ」なんて大人ぶって語りかけてきたりする。「マタニティマーク」の記事を取り上げ、その意味を知らせた時は「マークをつけている人を見た！ 席を譲ったんだよ！」と得意げに報告にくる生徒もいた。「本当に中学生って素直だな～」と感激しつつ、取り上げ方に偏りがないようにする責任があるのだと、改めて気を引き締める。

過去のニュースを紹介する時には、それが現在どうなっているか必ず確認する。その昔、数年前の記事を大事にとっておき、「これは〇〇市だけが実施している仕組みだよ」と説明したら、翌日「調べたら他の市も実施しているって書いてあったよ」と生徒に指摘され、恥ずかしい思いをしたことがある。最新の正しい事実の確認は、授業の直前に必ずやっておく必要がある。

「マンガ」や「映画」のシーンを紹介すると、「別のマンガにはこう描いてあるけど嘘なの？」「先生、〇〇の映画にもあったよ」などと新情報を提供してくれたりもする。貴重な実物教材を「うちにもありました！」とすぐに持ってきてくれる生徒が現れる。こうして私の授業は、生徒のおかげでどんどん発展し

ていく。予測不能でついつい時間オーバーしてしまうのが難点だが、生きた教材を生徒と見つける楽しさには変えられない。

最近は、「有名人の謝罪会見」など報道に使用された実際の写真や短い動画が簡単に入手できるので、導入で提示することもある。知っている生徒が誇らしげに手を上げ、知らなかった生徒が授業後の休み時間に新聞（現任校は各教室に新聞をおいている）を拡げて確認している姿を見ると、授業内容がその後の学習に繋がってこそ意味があるのだと、励まされる思いがする。

「子どもの成長と家族」の領域に、昨年ドラマ化された『コウノドリ』を使用した時は、勤務校の近くでロケがあったことも話題になっていて、生徒の反応が大きかった。病院の「産科、新生児科」を舞台に、科学的に検証された内容をマンガに取り入れたこの作品は、多様な家族が命に向き合うストーリーになっているばかりでなく、正しい知識を学ぶにもいい教材になると思い、いくつかのシーンを授業で利用した。授業後「読みたい人にはこのマンガ貸すよー」と言うと、「えー、生徒は持って来ちゃいけない言うのに先生はズルイー」と言いながら、何人が喜んで借りに来た。妊娠なんて男には関係ないと言っていた、自称「アニメオタク」の生徒が、「こういういい作品は、マンガであっても図書室にも置き、皆に読んでもらわなきゃいけないですか？」と授業後の感想に書いていたのも印象的だった。

(3) 生徒の声を拾う

授業後に、感想や質問を書かせるということを、教師はよくやるが、書かせっぱなしで終わったり、個別にコメントを書くだけ、というのはもったいない。それを共有してこそ、学校教育の意味がある。以前、性教育に熱心に取り組んでいる体育科の管理職が、「中学の保健で性交は扱わないと指導要領では言っているが、我々は生徒からの質問を無視することはできない。だから、生徒から質問されたから答えるという形であれば全く問題ない」と言って笑っていた。ただ納得させるより、疑問を感じたりムクムクとその先のことが知りたくなると質問が出るような授業の方が面白い。だから私は、「生徒の感想や疑問から次

の授業展開を考える」場面をつくることが多い。鋭い感想や質問は、次の授業で大いに褒めて紹介し、そこから次の話題につなげていく。年度始めにたてた「年間指導計画」はこうしてしょっちゅう変更することになる。教材準備に時間がかかり大変だが、生徒の反応が変わるのは楽しい。自分が楽しくなければ魅力的な授業はつukれない。

「家族」に関して取り上げる授業をする時に、特に大事にするのが実際に「高齢者」「乳幼児」「障がい者」と暮らす生徒の反応だ。「少数派」の彼らだからこそ気づくことは多い。衣食住どの分野の学習をしても、彼らの多くは、「社会的な弱者」になる人たちの立場から物事を見る視点を持っている。それを教室で紹介することで、自分には見つけられなかった視点に気づき、考えを深めることができる。これは教科書の説明文を読むよりも、数倍の影響をもつ。

他にも、少数派ながら中学生になると「家事の多くを担う」生徒が必ずいる。彼らはその事実をあまり前向きにはとらえていない。両親がフルタイムの共働きだったり、ひとり親家庭だったり、中にはネグレクトに近い状態にある家庭もあり、色々な意味で淋しい思いをしている生徒たちが多いからだ。一般に中学生になると、小学校時代よりも家事を担う時間が減る。勉強が難しくなり、放課後も部活や塾に忙しくなるからだろう。上げ膳据え膳の生活をしている同級生が多い中、帰宅後に家事をしている現実を自慢する生徒はなかなかいない。しかし、そういう生徒は家庭科の授業ではヒーローである。何にしろ、仕事の段取りがいい。生活上の知識も豊富である。「えー、弁当は全部自分で作ってるの!?!」「ゴミの収集日全部知ってる? エライ!」「洗濯物干すのも畳むのも家族分全部やるってスゴすぎ!」「弟のオムツ換えもお風呂入れるのもやってるの? そんなことできる中学生いないかも!」…と大絶賛し、話をどんどん振る。塾の最難関クラスにいることを自慢している生徒には、何一つ答えられないしできないことを彼らはできる。自信を持って、自分がその環境にいるからこそ身につけられる力を磨いてほしいという願いもあるし、他の生徒には、自立までに身につけなければならない「生きる力と知識」がまだまだ不足していることを実感させたいのだ。

(4) クラスの特性に応じた授業展開

リアリティのある授業を展開するために、実は一番基本となるのが、クラスの雰囲気である。互いの違いを認め合い、隠さず語り合える雰囲気のあるクラスでは、生徒の承諾を得ながら実例を語ってもらうことができる。クラスの仲間の話として、より実感が湧く。「俺の親父、料理にうるさすぎていちいち文句言うから母ちゃんに逃げられんだよ〜」「うちのお姉ちゃん出来婚して彼氏働いてないから、赤ちゃんと家に来ちゃったんだよ。夜泣き大変でまいるわ〜」そんな深刻な事情をクラスの仲間と笑い合って語れるクラスでは、どんどん話が盛り上がる。担任を信頼していることが伝わってくるクラスでは、担任の許可をもらい、「〇〇先生、娘の人見知りが始まって、自分が抱くと泣くって悩んでるから励ましてやってね」などと担任の家族をネタにもできる。

そんな展開が困難なクラスや、反応が薄くすぐに静まりかえってしまうクラスの時は、私の身内や、友人の話を実例として語る。授業後の感想に、「先生は家族の話や余談が多すぎます」と書かれ苦笑したこともあるが、私としてはその場で思いついた余談のフリをしつつ、実際には敢えて話題にしているのだ。

授業実践例

中学校家庭科の学習は、

- A 家族・家庭と子どもの成長
- B 食生活と自立
- C 衣生活・住生活と自立
- D 身近な消費生活と環境

上記の4つの内容から構成されている。これら全てを3年間を通じて学び、その学習の進め方(時期や順序)は学校に任せられ学年の指定も無い。教科書では「家族」に関して、Aの内容のところで取り上げられている。

しかし私は、「家族」について3年間のどこかでまとめて扱うのではなく、3年間を通じて子どもたちの発達段階にも応じて、繰り返し考えさせる方法をとるようにしている。

以下に、そんな私が現任校のどの学年のどんな内容の中で「家族」を取り上げているかをまとめてみた。地域や学校の特徴も考え、「家庭科の授業だけ」でなく、他教科や学校行事との繋がりも考えながら、学習内容を精選している。

『衣生活・住生活と自立』の学習の中で（中学1年生）
～生徒の実態とねらい～
①標準服や体操着・エプロンなど、中学校で着用するようになった「衣服の手入れ」を題材に『家事と家族』の関係や自分の役割について考えさせる。 ②本校は総合的な学習の時間に、「福祉体験学習」を取り入れているため、その時期に合わせて「家庭内事故」や「高齢者疑似体験」を取り上げ、『高齢者、乳幼児、障がい者との家族の暮らし方』の工夫を考えさせる。 ③架空の家族が住む住まいの学習の中で、『家族の変化』について考えさせる。
～授業の展開方法～
①「衣服の手入れ」 - 衣服の手入れの仕事の種類を学び、その仕事は主に家族の誰が担っているか考えさせる。一日の大半を学校で過ごす中学生の知らないところにも大切な仕事があることや、家族構成に関わらずそこに「母親」がいる場合、そのほとんどを「母親」だけが請け負っている家庭が多いことに気づく。 「諸外国との家事時間比較データ記事」を示し、日本の家庭では「女性」が家事の多くを負担している現実を知る。 - ドラマ『アットホームダッド』から、衣服の手入れの仕事を初めてやりながら学んでいく夫と、友人の専業主夫が出るシーンを見せ、「家事はそれぞれの家族の事情に合わせて、分担や方法を工夫できる」ことを知る。 - 夏休みに「家族全員分の衣服の手入れの仕事を1日引き受ける」課題を出す。仕事量の多さと複雑さを実感し、自分にも出来ることを考える生徒が多い。また、保護者にも、「中学生になった子どもが仕事をできない原因は、家庭内で教えたり任せたりしないからだ」ということに気づいてもらい、家族として自立への準備を伝える時期が来たことを知らせるねらいがある。 ②「安全な住まい」 「高齢者や乳幼児の心身の特徴」や「ユニバーサルデザイン」について学び、「家庭内事故」は、

本人や家族の努力だけで予防できないことに気づかせる。

- ・実際に「乳幼児期の実体験」や「高齢者と暮らしている工夫」を生徒に尋ね 厚生労働省や消防庁のデータと比較しながら紹介する。
 - ・様々なハンディのある家族と生活するために工夫されている「共用品」や社会のしくみを紹介し、各自に「ユニバーサルデザイン」について調べ学習と報告スピーチをさせ、クラスで情報を共有する。
- ③「家族の変化と住まい」
- ・「サザエさんの家族と住まい」を使って、サザエさんの家族の10年後の暮らし方を想像し、同じ間取りの使い方をどう変えたらよいかを考えさせ、「家族の変化」について、イメージを上げさせる。
 - ・「サザエさんの家族が、教科書に出てくる3LDKのマンションに引っ越したら、どんな部屋の使い方をするだろう」という課題に取り組み、同じ間取りでも家族の構成メンバーや特徴により、暮らし方を工夫できることを考えさせる。

～授業後の変化～

- ①「料理」は好きでよく手伝う生徒はいるが、「衣服の手入れの仕事」については、部分的な手伝いで終わっている生徒が多い。「大した仕事じゃないし、親がして当たり前」という感覚もある。授業後に、「靴下は自分で下洗いをするようになった」という生徒や、夏休みの課題の保護者のコメントに、「洗濯機の使い方や干し方のコツを初めて一つひとつ教えながら、もう子どもに任せていいんだと気づきました」というものが、必ず出てくる。
- ②学習前は、「家庭内事故」の防止方法について、「本人や家族が見守っていればよい」と簡単に言っていた生徒が、実際にはそれは難しいことに気づく。
- 社会の仕組みを利用する方法や、共に暮らすために工夫された様々な商品を知ること、家族の安全を守り支えるのは家族のみで負えるものではなく、社会全体で支えるしくみが必要であることが、理解できる。
- ③「サザエさん一家がマンションに引っ越したら」の課題には、9割以上の生徒が、「高齢者は和室」という固定観念から、「和室には波平さんとフネさん」という使い方を選ぶ。ところがクラスに2～3人は、「おじいちゃんおばあちゃんは洋室がいい」と答える。実際に祖父母と暮らした経験のある生徒たちだ。「おじいちゃんには布団の下ろしがつらいから」「夜トイレに近い方がいいから」「椅子の方が動作が楽だから」…と、理由を述べるのを聞いて、他の生徒たちも「なるほど～」と感心する。玄関への近さにこだわった生徒は、「家の奥だと引きこもっちゃうから。玄関の近くなら近所に散歩に出かけやすいし、家族が帰ってもすぐにわかるでしょ」と説明。個々の生活経験は少なくとも、こうして共有することで、視野は大きく広がる。

『身近な消費生活と環境』の学習の中で（中学2年生）
～生徒の実態とねらい～
①買い物だけでなく、パソコンやスマホでゲームやSNSを楽しむことも、Suicaを使うことも、「契約」なのだという自覚がない。契約について学習した後「もしも家族に***という出来事が起こったら……」という内容でロールプレイに取り組みながら、家族の役割について考えさせる。 ②日本の食料自給率の低さと食品ロスの多さの矛盾を学習する中で、「フードバンク」の存在を知らせ、「児童養護施設」などの福祉施設や「貧困」についても学ぶ。
～授業の展開方法～
①「家庭生活と消費」 消費者センターなどから入手した、実際の消費者トラブルの事例をもとに、「もしもこんな電話がかかってきたら」「スマホやパソコンにこんなメッセージが届いたら」…などという想定で、「中学生」を主役に、「父」「姉」など家族の役割も決めて、セリフを考えさせる。この授業は、クラスの雰囲気によって左右されるため、教師が作っておいたシナリオ通り演じさせる場合もある。どうしても役者が出てこないクラスの時は、事例紹介の4コママンガのセリフを消し、吹き出しの中に想像したセリフを書かせ紹介したりもした。 ②「日本の食料事情」 ニュース報道の記事や動画が多く配信されているので、それを使って解説し「児童養護施設」などで生活する子どもたちのことを知らせる。
～授業後の変化～
①架空の家族として考えさせるため、生徒たちは自由に「自分のイメージする家族像」で発言をする。実際に自分が家庭で言われたセリフになることもある。悪質業者が「家族ならではの弱み」につけ込んでいくことにも気づく。 授業の中で「うちの親も」「兄ちゃんが」「私の家にも」と、次々と告白してくるので、決してニュースの中での特殊な話ではないことがわかってくる。 ②資料映像に、実際の児童養護施設が登場するので、理解もしやすいようだ。3年生の学びの場面でも、もう一度振り返って思い出させる。

『家族・家庭と子どもの成長』の学習の中で（中学3年生）
～生徒の実態とねらい～
3年間関わる事ができた学年では、それぞれの家庭の事情について把握した上で授業ができ、将来を真剣に見つめられるこの時期こそ扱いやすい内容だと思っている。子どもの成長について学ぶ際は、自分の過去を振り返るというより、これからは社会に生きる大人として、生まれてくる子どもたちにどんな責任があるのかを考えさせるようにしている。
～授業の展開方法～
①中学卒業後のライフデザイン 「学生生活はいつまで?」「仕事はいつ始めいつまで続ける?」「結婚はする? するならいつ頃?」「同居人はどう変化する?」…など自分の未来のデザインをした後、実際のデータを示し、日本の家族の課題についても考えさせる。 同居メンバー予定を使い、「家族の変化や多様性」に触れる。 ②「子どもの成長と家族」 子どもは家族だけでなく、社会の仕組みの中で育てられること、子どものいない大人も、実はその仕組みに大きく関わっていることを、公民の「社会保障制度」の話とも繋げながら学ばせる。 ③卒業後の生き方を考える 「性の学習」とも繋げながら、子どものいる家庭が「普通」ではないこと、「家族」は思い通りにすることができないこと、などを理解させた上で、3年間の学習を通じて考えたことを書かせ、紙上発表する。
～授業後の様子～
①デザインは、楽しみながらやり、「老後はのんびり孫と遊んで暮らす」などと書いているが、その後様々なデータを見ながら日本の家族の課題を学ぶうち、「ヤバイ、やっぱり仕事続けなきゃ」「子どもがいないと老後が厳しいの?」と言い出す。生徒たちが生きてきた僅か15年の間にも、家族を取り巻く社会の仕組みが変化してきていることを知り、無関心ではいられないことに気づく。 ②③「自分は結婚しない、子どもを持たないからカンケーない」と思っていた生徒の反応が、ここで劇的に変わってくる。安易に結婚や子育てを語っていた生徒も「自分はこれからはっきり学んで、自分だけでなく周囲の人たちのことを考えながら生きる責任のある大人になりたい」「自分は将来結婚するのか子どもを持つのかわからないし、妊娠や出産を経験することもないけれど、どんな立場になっても無関心で無責任な男にだけはなりたくない」と書き始める。何て頼もしい! しかしその気持ちを忘れずに、これからも学び続けてほしいと、授業を締めくくる。

今後の課題

3年生にこんなクイズを出した。「結婚したら原則として夫の姓を名乗る。○だと思う人？」過半数の手が挙がった教室で「私は生まれてからずっと姓は笹森です」と言った途端ザワザワ。私に子どもがいると知っている生徒たちは「じゃバツイチ?」「ミコンの母だ」「フリんだ」と騒ぎ出す。公民で夫婦同姓のしくみを教わっていても男性の姓を名乗るのが普通だと思い込んでいる。どちらの姓を選んでもよい事実を知らない。そこで初めて、「夫婦別姓」のニュースの意味が理解できるようになる。授業は、生徒も教師も発見の連続だ。家庭科は他教科の学びを、自分の生活に繋げる役割も果たしていると思う。

「人権について考える」授業の中で、あるベテラン教師が、自分の子が障がいをもっていることに触れ、誕生後間もなくその障がいについて知らされた時の衝撃を涙ながらに語ったことがあった。その直後、2人の生徒が泣きながら私のところへやってきた。二人とも、同じ障がいをもつきょうだいがいる生徒だった。自分の親も本当は、そのきょうだいが生まれたことが嫌なのではないかというのだ。もちろんその教師が話をした意図は、全く違っていたのだと思う。障がい者を差別することがその家族も苦しめるということを伝えなかったようなのだが、「感動した」「真剣に考えた」という多くの生徒の感想文とはうらはらに、当事者の二人はショックを受けてしまった。私もよく、自分の困難な体験を話すことがあるが、生徒の受け止め方を勝手に思い込みだけ決めつけてはいけなさと痛感した出来事だった。

残念ながら現場には、「ひとり親家庭」「祖父母と暮らす生徒」といった、見た目の構成メンバーにだけ囚われ、「両親が揃っているから大丈夫」と安易に考える教師がいる。「実は両親が別居中」「片親が病気で働けない」「DVや虐待を受けている」「再婚した父親に気を遣っている」「母が祖父母の遠距離

介護に追われ不在がち」「障がいのある家族と暮らしている」「引きこもりや不登校のきょうだいがいる」「きょうだいが全員有名私立中に合格して、自分だけ劣等感を抱えている」「母親が外国人であることを隠している」「毎日家族のけんかの仲裁をしている」…担任をしたり、相談の中で偶然に知る「多様な家族」の現実とは、時に厳しい。相談を受けても、何も出来ない無力感に苛まれることの方が多い。

生徒それぞれが過ごす家庭の、本当の多様性を想像することができれば、「理想の家族の愛と役割」を強調する授業にはならない。「当たり障りの無い話」ですませてはいけないこともわかる。中学生になれば、選べなかった自分の「家族」の現実や課題を見つめる力もある。ただ「感謝」したり「悲観」して終わるのではなく、これからどんな力をつけ学んでいく必要があるかを本気で考えるチャンスにもできる。「各家庭」が孤立しないよう、周囲が気づき支えるしくみが大切であることや、それを頼りSOSを出せる力も重要であることも学ばせたい。

3年生の授業は隔週に1時間しかない。我が家の娘たちに「家庭科は皆、捨て教科だって言ってる」と言われた時は本気で悔しかった。全国の仲間に「共に頑張ろう!」と伝えたい。家庭科という教科だからこそできる学びは多いと思う。